

大瀧 貴之 (中国文学)

『藝文類聚』を中心とした唐代勅撰類書の研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、唐代最初の勅撰類書(百科事典)である『藝文類聚』を中心に、『初学記』『白氏六帖』を含む所謂「宋刊唐代三大類書」について、編纂の目的や過程と当時の政治背景、項目の分類概念や避諱処理、更に補綴と増修の問題等について考察したものである。

序論では、「唐代四大類書」のうち、写本で伝承した『北堂書鈔』を除く『藝文類聚』『初学記』『白氏六帖』について、新たに「宋刊唐代三大類書」という概念を提起する。

第一章「唐代勅撰類書の中核概念」では、本論文の中核をなす唐代「類書」の概念について、『藝文類聚』と『群書治要』を手掛かりに考察する。本論文によれば、当初の勅撰類書は後世の所謂一般工具書ではなく、皇帝の能率的な群書閲覧に供する為のものであった。

第二章「類書勅撰の政治的意義」では、皇太子李建成と秦王李世民(後の太宗)間の熾烈な皇位継承争いの中で、『藝文類聚』が欧陽詢主導下に成立した過程を克明に論述する。従来の研究の空白を解明した本論文の圧巻であり、原著論文は日本中国学会賞を受賞した。

第三章「唐代類書に見える避諱の影響」では、唐代に編纂され宋代に刊行された類書について、『藝文類聚』を中心に、編纂時における避諱や、それに伴う部立て改変の問題を論じる。続く第四章「『藝文類聚』本文批判の一指標」では、『藝文類聚』の詩賦作品の配置原則について検証し、原則の例外として載録される詩賦作品が、唐代編纂時ではなく、後世に補入改変された可能性が高いことを豊富な実例を以て論証する。これら『藝文類聚』本文の避諱や異同については本格的な先行研究に乏しく、本論文が新たな研究成果となる。

第五章「南宋出版時における『藝文類聚』の条文修補」、及び第六章「伝承過程における『白氏六帖』の部立て増修」では、『初学記』による『藝文類聚』の部分補綴、あるいは『藝文類聚』『初学記』による『白氏六帖』の全面的な部立て増修が、後蜀-北宋-南宋の王朝交代後における印刷出版時に行われたことを、各類書に収載される文献の詳細な対照調査によって明らかにする。これらの実証的な研究も従来無かった本論文の新たな成果である。

そして最後に、結論「宋刊本に潜む唐代類書本文上の問題点」では、政治権力と類書編纂、王朝交代と類書の改変、現行テキストの批判的活用と類書の原貌考究の必要性について、これまでの論述を踏まえ、総括して述べる。

今日我々は必要に応じて類書等の工具書を随時活用するが、工具書自体の意義や成立の背景等について文学史的関心を払うことは少ない。しかし類書もまた中国文学史上の貴重な成果であり、王朝交代に伴う政治権力の争闘の中で成立したものであることを、本論文は優れた着眼で実証的に解明した。従来の文学史研究上の空白に光を当て、多くの新たな研究成果を学界にもたらした功績は評価でき、今後の研究の更なる進展が期待される。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つものであることを認める。